

Title	書評：鈴木正崇著『熊野と神楽：聖地の根源的力を求めて』平凡社、2018年
Sub Title	
Author	神田, より子(Kanda, Yoriko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.159- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

鈴木正崇著『熊野と神楽——聖地の根源的力を求めて』

平凡社、2018年

神田 より子

本書は平凡社のブックレット、<書物をひらく>シリーズの第12番目にあたる。総ページ数116で、1000円という薄くて手ごろな値段である。学生時代から山と旅が大好きな鈴木正崇氏は、慶応義塾大学を退職した後も精力的に駆けずり回っているように見える。だから本場熊野と各地の熊野神社を巡り、その地で演じられる神楽を巡る旅の本と理解したら、大間違いだ。中身が濃いのだ。資料を渉猟し、歴史的にそして研究者によって解釈されてきた熊野と熊野信仰に、鈴木氏は旅をしながら思索し、聖地を巡りながら新たな意味づけを試み、解釈を施してきたのが本書である。軽く手に取ることができるが、内容は重い。本書の構成は、はじめに、1 湯立から湯立神楽へ、2 縁起から神楽へ、あとがき、と大きく二つの項目に分かれ、引用史料・主要参考文献、掲載図版一覧と続く。内容を見てゆこう。

はじめに神楽とは歌舞音曲で神仏と交流し、神遊びや仮面による能舞、神がかり、死霊の鎮めや悪霊の攘却等を行う祭祀芸能だとする。その上で熊野信仰の中核にある湯の信仰に基づく湯立が、湯立神楽として展開した過程と、熊野の起源と由来を解く縁起が各地に伝播し、神楽が生成していった過程の二つの視点を提示する。その際、熊野信仰の伝播と展開に果たした山岳信仰と修験道の役割を重視し、縁起や物語、祭りの特性を交えて神楽を通して聖地の根源的力を明らかにする。こうした視点に立って鈴木氏の熊野と神楽の旅が始まる。

1 湯立から湯立神楽へでは、日本の民俗社会では湯立の儀礼は修験・巫女・僧侶・神職・行者などが担い、神事、修験道儀礼、湯立神楽の三種類がある。湯立は神と仏の双方の祈願・祈祷に関わり、その機能も神意を知ること・験力の誇示・先祖供養・死霊の慰霊など多様だった。本書は各地に広まった熊野信仰と湯立や湯立神楽との関係を通して、仏教と民俗の接点において修験道の果たした役割や、儀礼と神楽の持つ意味を考察する。そこで熊野信仰の中核として湯を取り上げ、冥界から戻った小栗判官の蘇生譚や、熊野権現出現の霊地である大斎原を例として、「湯」や「斎」の觀念の多義性を示した。次に各地の湯立と熊野の関係を探り、火と水の合体による湯立を儀礼の力とし、時空を超えて日本各地の祭祀や芸能を潜在的に統御していたのが熊野だったと類推する。

信仰の変遷を見て見ると、12世紀後半には熊野三山が確立期し、中世には熊野三山を巡拝し、本宮の証誠殿で阿弥陀の浄土往生を確証できたことで完成する。

この浄土の思想と実践は各地で変容を遂げ、湯は人々を再生・浄化させ、死者供養も意味し、奥三河の大神楽は近世初頭に「浄土入り」として村々が行う神楽へと変容した。

神田より子「書評：鈴木正崇著『熊野と神楽——聖地の根源的力を求めて』」

『三田社会学』第24号（2019年7月）159-163頁

湯立から湯立神楽への歴史的展開として、中世以降は密教・陰陽道・修験道の影響を受けて民間に伝播し、湯立の儀礼と結合して、変貌を遂げた。そのうち慶長13年(1608)に記された備後神楽では「荒神舞」「浄土神楽」など死者供養や逆修にも展開した。

神楽の起源と湯立に関する「中世神話」とも呼ぶべき解釈には、伊勢の「神道雑々集」によれば、天照大神の本地を大日如来とし、胎藏界大日を伊勢の内宮、金剛界大日を外宮に配する両部神道を基盤にした「胎金一如」の思想が見られる。伊勢の「湯立神楽」の起源伝承は、神楽が密教や陰陽道と習合して民間神楽へと移行する様を伝え、天から降りることに焦点が置かれた。

一方、奥三河の花祭や遠山郷の湯立神楽では、祭場を山と呼び「地」へと焦点が移る。当地の湯立神楽には熊野の影響がみられ、天竜川中流域では熊野と諏訪を往来する修験者が神楽をもたらし、在地の信仰と融合し定着した。

熊野信仰の多様な展開の中で湯立は火と水の信仰を基本に、儀礼や舞では豊かな呪法がみられ、担い手は精霊統御者 (spirit master) の類型を示し、修験の伝統とつながる。花祭りの最高神は「切目王子」と「見目王子」で、悪霊を「切る」不可視のものを「見る」能力を持ち、熊野の王子信仰を守護霊に転化した修験の霊能を凝縮したような神霊である。

熊野信仰は熊野への参詣により後世安楽・浄土往生を確証して「臨終正念」を得ることを目的とし、現世利益の願いも込められた。神仏混淆の時代に仏教の教えは教義よりも儀礼や芸能を通じて民衆の間に浸透した。

熊野信仰の中核にある浄土思想、現世利益、託宣、立願、湯立、神楽などの諸要素は地方に伝播して、各地で独自の再解釈が施された。民衆にとっても、生と死の双方の願いを湯に託す思想と実践は、自然や神霊との交流を図る演劇的な体験として魅惑に満ちていた。

2 縁起から神楽へ、では中世の熊野と九州の彦山の縁起を比較して、熊野信仰の地域的展開を検討し、縁起から神楽へという変貌の様相を探る。熊野権現の由来の最古のものは長寛元年(1163)の本宮に関する『熊野権現御垂迹縁起』である。熊野権現は、唐の天台山から飛来し、彦山、石鎚峰、切部山、新宮の神倉、阿須賀の北の石淵の谷に移り、そこで結玉、家津美子と名乗り、その後本宮大湯原に天降り、獵師の問いに「我は熊野三所権現、一社は証誠菩薩、二社は両所権現」と答えた。この縁起は本宮中心の三山の構成が整った後に書かれ、浄土思想、末法思想の普及で上皇や貴族の熊野詣でが盛んになり、本宮が三山の最上位となり、極楽往生の証明を受けられる場所とされた頃である。本地垂迹思想が定着し、熊野の神々の本地が阿弥陀、薬師、千手観音となり、神仏が一体化した。熊野御幸は白河上皇の寛治4年(1090)以降本格化した。このとき園城寺の増誉が先達を務め、熊野三山検校に任じられ、聖体護持の任を果たす為京都に聖護院が与えられ、後に天台宗の本山派修験の拠点となった。御幸は延べ93回に及び「蟻の熊野詣」と言われたが、承久の乱(1221)以降衰退した。

熊野の縁起から神楽への展開に重要なのが切目王子で、『熊野山略記』『平家物語』『諸山縁起』

では魔物が徘徊し、境界の儀礼を行う重要な場所とされる。切目は負の属性を帯びたものとの出会いの場で、熊野権現と稲荷明神の加護を得て乗り越える境界だった。切目王子ではナギ(柺)がご神木で、これを身に着けて護符とした。ナギや牛玉などの護符は、熊野権現の使役霊・護法神と同体とされ、王子信仰として各地に広まった。王子は熊野の使いとして修験の力で統御されたが、荒ぶる神の観念を伴い各地で変容、定着した。

これらを踏まえ切目王子の地域的な展開を考える。舞としては切目神楽が出雲・隠岐・石見・安芸北部に伝わる。石見では「切目」が「切女」になり、託宣を下す女性に読み替えられ、熊野比丘尼が二重写しになる。奥三河の花祭では切目王子は当地で生成された見目王子みるめおうじとともに重要な神とされ、キルメは花祭の根源に関わる。天正8年(1581)の『御神楽日記』では、切目が勧請された上で、神楽の功力で三途の川を渡り、「白山」への「浄土入り」となる。仏教の外被を纏いつつ、大自然の荒ぶる力を再構築して別の世界への移行を可能にする、奥三河の独自の世界観がここに展開する。

切目王子と関連し、花祭に登場する七十五の数は修験の山岳修行の峰入りとも深く関係する。これは魍魎魍魎の全体を象徴する数で、宇宙の総体の意味があり、山を居所とする諸霊全体を意味する。

牛玉宝印の発祥の地は熊野とされ、熊野や大峰山の霊威を凝縮した護符で、牛玉は護法とも解釈され、仏法を守護する神で、修験が使役する地主神は荒神であり、障礙を統御して仏法に帰依させて護法神や伽藍神とする。奥三河での大神楽の「牛王渡し」祭文では「注連を開く」事で穢れを祓い、注連の牛王を身につけ、最後に山で修行をし、牛王=護法=金剛童子の助けで再生する。牛王と注連の多様な意味づけで神楽の世界は新たな展開を示した。

熊野信仰は時空を超え修験と関連し、神と仏、外来と土着、巫女と修験、縁起と神楽など異質の要素を結び多様に発展したが、紀州はその原点だった。

最後に、熊野信仰は明治維新によって神仏混淆が解体されたにもかかわらず、古代から現代に至るまで継続している。その原点、特に聖地・熊野の根元的力は何かを問うてきた。熊野は湯と深い関係があり、また熊野本宮の旧鎮座地は熊野川と音無川の合流点の中洲のオオユノハラにあり、大湯原や大斎原と書く。斎は「斎いっく」の意味で、神霊がよりつく場を表す。熊野は多義性に満ちた聖地であり、湯がその根源ではないかと問い、本書は神楽を読み解く形で展開し、熊野信仰の中核にある根元的力の解明が主題であったという。

本書では「熊野まみれ」と言えるほど、日本全国の民俗宗教や芸能に熊野の影響が見てとれる。しかし鈴木氏も言うように、明治維新の神仏混淆が解体され、明治以前の姿を思い描けないほどに変貌した地域も多くある。こうした歴史的な経緯を知らなければ見えてこない世界がこの国には息づいていた。この豊かな精神世界を再構築したのが本書である。熊野信仰の核心は、熊野への参詣により二世安楽・浄土往生を確証して「臨終正念」を得ることを目的としたことだ。それは教義よりも儀礼や芸能を通して民衆の間に浸透した。それ故、信仰の中核であ

る浄土思想、現世利益、託宣、立願、湯立、神楽などの諸要素が地方に伝播して、各地で独自の再解釈が施された。熊野で生まれた思想を肝として、各地の文化と融合し地域ごとのコスモロジーが生成し展開したのだ。その伝播と展開に重要な役割を果たしたのが山岳信仰と修験道であり、本論のキーワードでもある。

以下では鈴木氏の言説に寄り添いながら、まずは評者の主なフィールドから「熊野まみれ」の状況をひもといてみたい。東北地方で熊野信仰が盛んになり熊野詣が流行したのは13～15世紀で、その立役者として熊野の御師や先達がいた。その結果、各地で熊野権現社が建立され、独自の文化が開花した。その一つが南北朝期以降に獅子頭を熊野の神の顕現とする権現様への信仰という形式を生み、権現舞、獅子舞、お頭舞などと称して、東北北部に分布する修験系の神楽の生成と深く結びつく(神田より子 2008、pp9-41、同 2011、pp1-19)¹⁾。

一方熊野と神楽と修験の結びつきは危うい状況も生み出した。本田安次は早池峰山麓の神楽を「山伏神楽」(本田 1994)²⁾と名付け、結果として一人歩きをしている。この「山伏神楽」が生まれた早池峰山は修験道修行の拠点で、その修験者がこの神楽を作ったという歴史を創作したのは長澤壮平(2009 pp1-41)³⁾だ。長澤は先行研究の資料批判をすることなく自身の論文に取り入れた。またそれに追従したのは中島奈津子(2013、pp18-38、pp161-172)⁴⁾である。近世期の南部藩資料『御領分社堂』中の「修験持社堂」には早池峰神社及び妙泉寺の記載はない(岸昌一編 2001)⁵⁾。早池峰山に修験の拠点がなかったことは先学の研究で判明している(菊池照雄 1977、pp108-129)⁶⁾。

また青森県の旧南部藩領に分布する能舞以外の神楽の源流は早池峰山の「山伏神楽」だとし、夏の早池峰神社祭礼への巡礼を繰り返す神楽団もあるが、この地の神楽の多くは明治以降に岩手県北部の神楽衆が広めたものだ(神田より子 2009、pp204-248)⁷⁾。

さらに資料が少ない中世期の神楽の担い手を「山伏・修験」とした山路興造の論(2008、p6)⁸⁾がある。山路は「中世後期に修験山伏・法者などの宗教者が、その教義に基づく宗教装置(天蓋や切り紙・五色幡・五色幣など)を設定し、宗教儀礼と共に伝播した」(山路「佐陀神能」再考-「佐陀神能」は慶長期以降の改革神楽である-」民俗芸能学会研究例会レジュメ 2018、9、9、p3)⁹⁾という。何の説明もなく神楽の担い手を山伏修験と決めつけるのは、芸能史研究の第一人者の論とは思えない論述であり、これらが一度ならず示されている。

ここで指摘した内容も含めて、鈴木氏がキーワードとした山岳信仰と修験道そして神楽に関して、危うさを含めた研究論文や書籍が出版されているが、鈴木氏はこうした研究にメスを入れ、その攻撃の手をゆるめる気配はない(鈴木 2018、9、22)¹⁰⁾。だが修験道との関わりは芸能研究の立場からは難しいのかもしれない。熊野信仰の中核としての湯の信仰や熊野の起源や由来を説く縁起が、各地に伝播し、地域の中で展開されてゆく過程で、修験がどのように関わっているのかを詳細に検討する必要があるのだろう。

その希望は、最近の若手研究者が先学の研究を批判的に継承し、新しい視点を提示する機会も増えてきたことだ。彼らが鈴木氏の著作を批判し、継承してくる時期が早く来ることを望ん

でやまない。

【註】

- 1) 神田より子「東北地方における修験者と権現舞」『国立歴史民俗博物館研究報告 宗教者の身体と社会』第142集 立歴史民俗博物館 2008、pp9-41、神田より子「山伏神楽・番楽から見た獅子舞—鳥海山周辺を中心に—」『民俗芸能研究』第50号 民俗芸能学会 2011、pp1-19)
- 2) 本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能 山伏神楽・番楽(復刻)第5巻 神楽V』錦正社 1994、本田が名付けた「山伏神楽」という名称の初出は1933年(昭和8)の仙台放送局の講演記録「霜月神楽と柴燈と」の中で「早池峰山山麓一帯に、山伏神楽と称する一種の神楽が分布しています。」と述べたことである(『本田安次著作集 日本の伝統芸能 陸前浜の法印神楽(復刻)第4巻 神楽IV』錦正社 1994 pp536-555)。またこの文章を含んだ『陸前浜の法印神楽』(初版は1934、pp1-14 前掲書に同)の自序にも「陸中一帯に分布している山伏神楽の名に呼ばれている舞が」と述べている。1933~4年の時点で本田にとっては自明の如く山伏神楽と称する神楽は分布していた。
- 3) 長澤壮平『早池峰岳神楽—舞の象徴と社会的実践』岩田書院 2009、pp1-41
- 4) 中島奈津子『佛教大学研究双書 18 早池峰岳神楽の継承と伝播』思文閣出版 2013、pp18-38、pp161-172
- 5) 岸昌一編『南部領宗教関係資料 1 御領分社堂』岩田書院 2001
- 6) 菊池照雄「早池峰修験と妙泉寺」月光善弘編『山岳宗教史研究叢書 7』名著出版 1977、pp108-129
- 7) 神田より子「演目から見た東北北部の神楽」『南部切田神楽調査報告書』十和田市教育委員会 2009、pp204-248
- 8) 山路興造「神楽とは」島根県立古代出雲歴史博物館編『島根の神楽—芸能と祭儀—』写真出版 2008、p6
- 9) 山路興造「「佐陀神能」再考—「佐陀神能」は慶長期以降の改革神楽である—」民俗芸能学会研究例会レジュメ 2018、9、9、p3
- 10) 鈴木正崇「神楽研究の課題と展望」シンポジウム「死者儀礼と「浄土神楽」」佛教大学 2018、9、22

(かんだ よりこ 敬和学園大学名誉教授)